花　き

これからの時期は梅雨もあり湿度が高くなります。毎年この頃から病気の発生も増えますので、風通しや日当たりを考えて芽掻きや芽整理等を早めに行いましょう。病害虫の被害を受けた茎や葉は速やかにほ場外へ持ち出し、土を掛けて埋めるなどの方法で処分しましょう。病害虫防除は予防が肝心ですので、時期を逃さないよう心掛けてください。乾燥傾向が続くと、アブラムシ類、アザミウマ類、オオタバコガ等の夜蛾類の被害も目立ってきます。ほ場周辺部の除草を徹底し、害虫の増殖防止に努めます。

１　リンドウ

（１）茎数整理

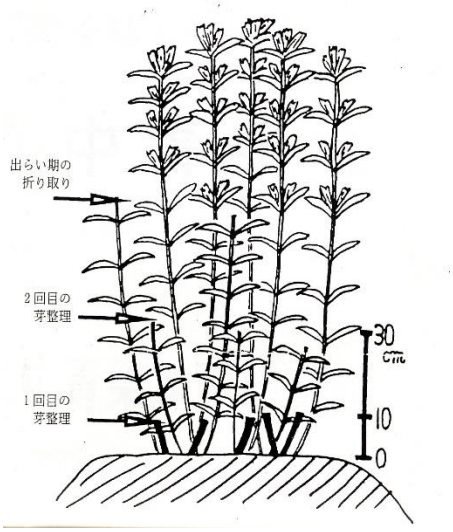
第１回目の芽整理は２０㎝で行います。生育の悪い物、細い物から摘み取ります。

第２回目の芽整理は３０㎝で行い、細い物、生育の遅い物の成長点の部分を摘み取ります。

仕立て本数は坪当たり１８０本を目標とします。

（１株当たり７～８本仕立て２～３本は切花しない。）

写真１　リンドウの萌芽



（２）葉枯病対策（セブトリア）

褐色の円形状の病斑で周囲が紫色を帯びることが多く、古い病斑の中央部に細かい黒点を形成します。伝染力が強く多発後の薬剤散布では効果が低くなります。

伝染経路は、前年の被害残さや土壌から雨水の跳ね上りなどで下葉に一次伝染し病斑で形成された胞子は空気伝染で広がります。 やや低温と多湿条件下で蔓延しやすく９月に被害が多く目立つことが多く多窒素や過繁茂も発病を誘発するので注意します。

防除のポイント

①発病が認められたら直ちに病斑のある葉を取り除きほ場外へ持ち出して処分して下さい。

②通路や株元の除草を徹底して風通しをよくします。

③雨が続き発生しやすい状況になったら、予防的に防除を行いましょう。

写真２　リンドウ葉枯病

２　トルコギキョウ

普通作型の管理（6 月～8 月切り花）

（１）分枝整理

抽だいが進むと、地際部から分枝が発生しています。分枝は品種によって発生に差がありますが、分枝を放置しておくと主枝の生育が劣るので、早期に分枝元からかき取ります。

この作業は、生育に応じて、数回に分けて行います。分枝を摘除する部位は、品種や作型によって異なりますが下から６節程度までの物を摘除します。

（２）花蕾整理

大輪系品種は早めに蕾数を制限することで、花が一段と大きくなり、花茎のボリュームもつきます。また、余分な蕾を早く取ることで茎が締まり、しっかり硬くなります。蕾が出た後、開花の揃いを考えて余分な蕾を取ります。ほ場内で早めに行うことで掻いた痕の傷を目立たなくし、品質の向上にもつながります。

３　シャクヤク

（１）切り花後の管理

施肥は、開花から概ね２ヵ月後を目安に、窒素、リン酸、カリの三要素ともａ当たり成分量で２年目株は０．３kg、３年目以降の株は０．４kg を目安に施用します。切花以降の管理次第で、翌年の開花本数も決まるので、乾燥と病害虫に注意し、秋に霜が降りるまでは葉を健全に保ち、株の養成に努めて下さい。うどんこ病などが発生すると、株が枯れることはありませんが、次の年の生育が劣りますので定期的な防除を行います。

写真３　シャクヤク

４　アリウム（ギガンチウム、オオニソガラム等）

（１）切花後の管理

花が終わったアリウム類は球根に栄養を蓄えさせる時期になります。ものによっては、葉が残らず、十分に肥大しているものがあり、また、ほ場の作付け計画上、球根を掘り上げることになります。晴れた日を選んで掘り取り、腐れの見られるものは捨てて、日陰で自然に乾燥した後、大きさで選別し、根を取るなどの調整をした後、直射日光の当たらない涼しい場所で保管します。